

## 【資料紹介】

# 西南学院大学博物館所蔵 「リラのニコラウスによる聖句註解付きラテン語聖書」

下園 知弥

## 解題

本資料は、中世後期に聖書積義家として活躍したリラ(リール)のニコラウス(Nicholas of Lyra, c. 1270-1349)による聖句註解(Postilla)が併記されたラテン語聖書である。リラのニコラウスによる聖句註解は、中世後期から近代初頭にかけて数多くの写本が作成されており、標準註解(Glossa ordinaria)と並んで当時最も知られていた聖書積義の一つである。その影響力たるや、「リラのニコラウスが豎琴(リラ)を奏でなかったら、ルターは踊らなかったであろう」(Si Lyra non lyrasset, Luther non saltasset)<sup>1</sup>と評されるほどである。しかしながら、彼の名も、その註解の内容も、今日では聖書積義の歴史に関する研究以外ではあまり知られていない。よって、資料の説明に入る前に、まずはリラのニコラウスと彼の聖句註解について簡潔に紹介したい。

## 【リラのニコラウス】

リラのニコラウスは、14世紀前半にパリ大学で教授していたフランシスコ会士であり、主著『聖書についての字義的註解』(*Postilla litteralis super Bibliam*, 1322-1332)によって最も知られている聖書積義家である。若年時代についてはほとんど知られていないが、1300年頃にフランシスコ会に入会し、その後パリ大学で神学を学び、同大学で神学教授を務めていたことがわかっている。ニコラウスの聖書積義の最大の特徴は、ヘブライ語の知識とユダヤ教徒による聖書積義の受容であり、彼の生きていた時代・地域にあってこのような聖書解釈法は稀少であった。というのも、1242年のタルムード焚書に代表されるよ

うに、13世紀以降パリでは反ユダヤ思想が蔓延していたからである<sup>2</sup>。

ニコラウス自身はキリスト教徒であり、時代の例に漏れず、ユダヤ教徒の信仰には批判的な立場であった。しかし同時に、ニコラウスは「ヘブライ語の真理」(Hebraica veritas)<sup>3</sup>というものを認めており、キリスト教の真理を補強し明瞭にするために——時には修正するために——ヘブライ語に立ち戻って解釈するタイプの積義家でもあった<sup>4</sup>。そのため、ニコラウスはユダヤ教のラビ(聖書学者)によるヘブライ語聖書の積義——とりわけ、ラシ(Rashi or Rabbi Solomon ben Isaac, 1040-1105)による積義——も重視していた。したがって、ニコラウスの信仰的立場は、反ユダヤ的とも親ユダヤ的とも一概には言い難い。確かなのは、ヒエロニムス以来、ラテン世界において、リラのニコラウスほどユダヤ教とキリスト教の連続性を意識しつつ聖書積義を行った聖書学者はほとんど存在しないということである。ゆえに、彼は「第二のヒエロニムス」(The second Jerome)とまで評されているのである<sup>5</sup>。

## 【聖句註解(ポスティラ)】

ポスティラ(Postilla)とは、中世後期に数多く制作されていた聖書註解書である。当時の聖書註解書の多くは、聖書積義に関する説教の集成であり、それがポスティラ(ポスティレ)と呼ばれていた<sup>6</sup>。説教との密接な関係を除けば、ポスティラは今日 Bible Commentaryと呼ばれている類の書物とほとんど同じであり、聖書の言葉(聖句)の註解のみが記されている。そのため、ポスティラは単に「註解」と訳されることもある。

リラのニコラウスによるポストイラは、数あるポストイラの中でも最も流布していたポストイラであると考えられる。というのは、中世後期に数多くの写本が制作されていただけでなく、活版印刷術の普及後、彼のポストイラは標準註解に組み入れられ、聖書釈義の定番書として西欧で定着していたからである<sup>7</sup>。とはいえ、ヘブライ語の知識とユダヤ教徒の聖書釈義を駆使したニコラウスによる聖書釈義は、彼の時代においても、それ以後も、西欧における聖書釈義の主流であったとは言えず、そのことが彼自身の知名度にもかかわらず学派や後継者が育たなかった大きな要因であると推測される。

### 【西南学院大学博物館所蔵「リラのニコラウスによる聖句註解付きラテン語聖書」】

西南学院大学博物館が所蔵する「リラのニコラウスによる聖句註解付きラテン語聖書」は、聖句とリラのニコラウスによる聖句註解が併記されたラテン語聖書のフォリオ(二つ折り判)の零葉である<sup>8</sup>。表面と裏面の左右に活版印刷(一部手書き)で聖句と当該箇所(註解)が記されており、いずれの頁も『マタイによる福音書』についてである。表面は第9章第33-36節およびAdditioとReplica<sup>9</sup>(左頁)、第12章第1-10節<sup>10</sup>(右頁)、裏面は第12章第11-25章(左頁)、第9章第18-32節(右頁)となっている。その構成からわかるように、本資料の間には何枚か別のフォリオが存在していたと考えられる。各頁の中央部には聖句が記されており、それを取り囲むように記されているのが聖句註解である。本資料解説では、全4頁の聖句註解のうち、第12章第1-25節について記している2頁について、テキストの校訂と翻訳を行っている。

聖書の当該箇所は、安息日の規定に関する問答と悪霊を追い出す奇跡物語の箇所である。Madiganの研究によれば、ニコラウスはマタイ福音書の第10章から第23章までを「律法の公布」として分類しており、第12章は「中傷者／ファリサイ派の論駁」についての箇所としている<sup>11</sup>。また、本資料では途中までしか記されていないが、ニコラウスはマタイ福音書

第12章の全体を四つに分割している。その四つとはすなわち、(1)イエス・キリストの真理が律法に違反しているとして彼を非難した者たちへの論駁、(2)神聖なる力によって為された業を悪霊に帰してイエスの善性を誣告した者たちへの論駁、(3)イエスの権能を試みて天よりのしるしを求めた者たちへの論駁、(4)イエスが引き受けた弱さを待ち伏せていた者たちへの論駁、の四つである。この四つはそれぞれがさらに分節され、詳細に議論されている。主題の細かな分類と筋道を立てて議論を展開していく手法はスコラ学のそれであり、ニコラウスが大学で学問を修めた人物であることを示している。

個々の釈義に注目すると、聖句の意味を当時のユダヤ教のコンテキストの中で説明しようとする姿勢が顕著であり、ニコラウスがユダヤ教の信仰と文化に精通したことを窺わせる内容となっている。たとえば、「安息日に神殿にいる祭司は、安息日の掟を破っても罪にならない、と律法にあるのを読んだことがないのか」というイエスの言葉について、当時の祭司が安息日に行っていた具体的な仕事に言及した上で、それらの仕事は神の礼拝へと秩序づけられているゆえに律法違反とされていないと解説している箇所(表面・右頁c-h節)は、ニコラウスのユダヤ教に対する知識の確かさを表している。

テキストの内容から離れてフォリオそのものに注目した場合、本資料は次の三つの点に特徴がある。第一に、本資料はインキュナブラ(Incunabula)と呼ばれる印刷本にカテゴリズされる。インキュナブラとは、ラテン語で「ゆりかご」を意味し、グーテンベルクによる活版印刷術発明以後の15世紀後半から1500年ごろまでに制作された書物のことを指す<sup>12</sup>。インキュナブラが制作された時期は活版印刷の揺籃期とされており、それが名称の由来となっている。つまり、本資料は、活版印刷が西欧中に普及する以前、徐々にそのシステムが確立しつつあった時代に制作された印刷本の断片であり、活版印刷術が確立していく過程を実証する歴史資料なのである。

第二に、フォリオ表面・右頁の欄外にマニクラ(Manicula)と思しき記号が記されている(図1)。

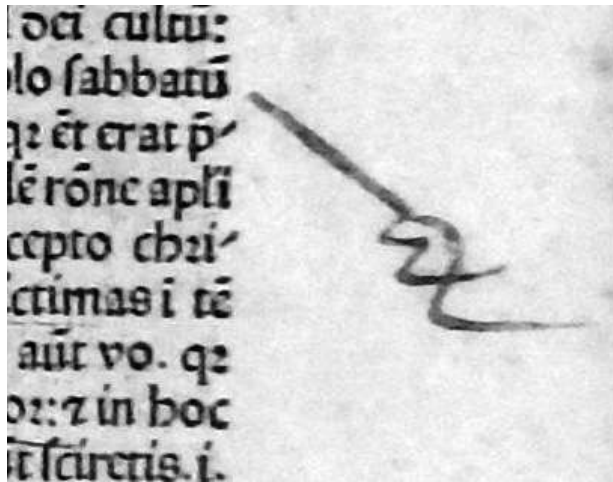


図1 本資料(表面・右頁)に記入されたマニクラ

マニクラとは、ラテン語で「小さな手」を意味し、特定の節・句に注目せよという意味の記号である<sup>13</sup>。言葉通り、小さな手の指先で文章を指示するように記されていることが多い。本資料におけるマニクラはsabbatu(m)という単語を含む一連の節・句を指示しており、この箇所が何らかの意味で重要であると記入者は考えていたことがわかる。しかし、その「何らかの意味」までは記されておらず、文脈から推測するしかない。

第三に、本資料は印字に手彩色が加えられたタイプの印刷本である。当時の印刷本の多くは、手彩色にする部分(冒頭の文字など)を空白にして印刷し、その後職人の手によって彩色されるという形式を取っていた。本資料も、章の冒頭の文字や節を意味する記号「¶」(パラグラフ)が手彩色によって記入されており、当時の印刷本のスタイルに則っている。

したがって、本資料は、テキストの内容においても、資料の年代や形式においても、中世後期から近代初頭にかけての西洋文明の一端を示す重要な資料であると言える。

## 註

- 1 *Dictionnaire de théologie catholique*, tome 9, partie 1 (Paris, 1908), s. v. "Nicolas de Lyre," p. 1420.
- 2 Deena Copeland Klepper, *The Insight of Unbelievers: Nicolas of Lyra and Christian Reading of Jewish Text in the Later Middle Ages* (Philadelphia, University of Pennsylvania Press, 2007), pp. 2-3.
- 3 Hebraica Veritasについては次の文献を参照。Frans van Liere, *An Introduction to the Medieval Bible* (New York, Cambridge University Press, 2014), pp. 84-87.
- 4 Klepper, *The Insight of Unbelievers*, p. 43.
- 5 Klepper, *The Insight of Unbelievers*, p. 32.
- 6 Liere, *An Introduction to the Medieval Bible*, p. 234.
- 7 Klepper, *The Insight of Unbelievers*, p. 6.
- 8 本資料と類似する「リラのニコラウスによる聖句註解付きラテン語聖書」の完本はハイネリヒ・ハイネ大学のデジタルアーカイブで公開されている (<http://digital.lib.uni-duesseldorf.de/ink/content/titleinfo/2295002>)。すべての頁が参照できるため、聖句註解の全容が気になる方はリンク先のアーカイブを参照。
- 9 本資料のAdditio(追記)はブルゴスのパウルスによるものであり、Replica(再考)はマティアス・デーリングによるものである。したがって、これらの箇所はリラのニコラウスによる註解ではない。
- 10 聖句註解のみ、第11章の一部が記されている。
- 11 Kevin Madigan, "Lyra on the Gospel of Matthew," in *Nicholas of Lyra: The Senses of Scripture*, Philip D. W. Krey and Lesley Smith eds., Leiden/Boston/Köln, Brill, 2000.
- 12 『キリスト教の祈りと芸術 装飾写本から聖画像まで』(西南学院大学博物館研究叢書、花乱社、2017年)、27頁。
- 13 Raymond Clemens and Timothy Graham, *Introduction to Manuscript Studies*, Ithaca/London, Cornell University Press, 2007, pp. 44-45.

### 【資料データ】

リラのニコラウスによる聖句註解付きラテン語聖書

Latin Bible with Postil of Nicholas of Lyra.

ヴェネツィア(イタリア)／1481年／紙製、活版、手彩色

### 【凡例】

1. 本資料紹介は、解題・校訂テキスト・翻訳・註の四つによって構成されている。
2. 校訂テキストは、略字を完全な単語で表記しているほかは、原則として資料の表記をそのまま用いている。ただし、以下の五点は例外とした。
  - (1)原文のローマ数字は、校訂テキストではアラビア数字で表記している。
  - (2)原文に明らかな誤りがある場合には、修正した単語を表記した上で、原文の表記を註に記している。
  - (3)ピリオド[.]が表記されている箇所は、後続する単語が大文字である場合はピリオドのまま表記し、小文字である場合はコンマ[,]で表記している。
  - (4)原文ではeと表記されている二重母音aeの箇所は、表記をaeに修正している。  
e.g. iudei → iudaei
  - (5)原文では各節が改行されずに記されているが、校訂テキストでは節毎に改行し、段落を分けている。また、裏面・左頁のa-節は節記号が重複しているため、[1]と[2]で分けている。
3. 校訂テキストを作成するに当たり、資料原文のほか、『ヴェネツィア版標準註解付き聖書』第5巻(*Bibliorum sacrorum cum glossa ordinaria*, tomus 5, Venetia, 1603)におけるリラのニコラウスによる聖句註解の箇所を参照した。
4. 翻訳するに当たり、聖句の箇所は新共同訳聖書をそのまま用いた。ただし、聖句註解の内容と新共同訳聖書の訳語との間に齟齬が認められる場合のみ、訳者の判断で齟齬のない訳語に変更している。聖句註解の箇所はすべて私訳である。



# Matthei

hesitantū iohes m̄z acciperet eos plē' ifo: mādī. 2. dicit  
 poreit q̄ christus tenuit moduz curialem: nam directe  
 r̄ndendo ad discipulorum hesitationē quā nouit uisus  
 fuisse hesitationem eorum redarguisse: qd curiale non  
 fuisse circa legatōez iohis factā. Curialitas igr̄ videt̄ tā  
 et pte q̄renis q̄  
 ex pte respondēt  
 dum r̄ iohes i sua  
 plona ierudilita  
 tem discipuloz n̄  
 detegret r̄ ch: ist'  
 sic curialiter q̄ren  
 ti respondit ne i  
 erudilitate legato  
 riz increpare vide  
 ret cum ad foruz  
 iohis p̄tinerent.  
 Modo aut̄ dicit̄  
 di burgen. quez h̄  
 addit multa inco  
 uenientia contin  
 gunt. p̄mū qz po  
 nit iohannes per  
 dinam reuelatoez  
 de christo r̄ d̄ his  
 q̄ de ipso erat scri  
 pta certitudinalit̄

**I**n illō tēpore **XII.**  
 Abijt iēsus per sata sab  
 bato: discipuli aut̄ ei' esurien  
 tes ceperūt vellere spicas r̄  
 māducare. Pharisēi aut̄  
 vidētes dixerūt ei: Ecce disci  
 puli tui faciūt qd n̄ h̄ eis fa  
 cē sabbatū. At ille dixit eis:  
 Nō legistis qd fecerūt dō q̄si  
 esurijt r̄ q̄ cū eo erāt: quō i  
 traui i domū dei r̄ panes  
 p̄positionis cōedit: quos  
 non licebat ei edere neqz  
 his qui cū eo erant: nisi so  
 lia sacerdotibus: Aut non

dūt cū de hoc q̄ discipuli ei' transētes die sabbati p̄ blada  
 vellebāt spicas r̄ cōfricantes māducabāt grana q̄si 3 legem  
 agerent ex christi doctrina: considerādū t̄n q̄ nō arguebat  
 eos agere cōtra legē q̄si raperent alienū: q̄ licitū erat intra  
 re legē p̄ximī r̄ comedere: nō t̄n mēte falce: vt habetur  
 Deut. xxiij. sed qz vno  
 labant sabbatū: qz p̄  
 ceptū erat in lege q̄ cū  
 baria p̄pararent die  
 p̄cedenti: r̄ non i die  
 sabbatū: vt hēt̄ Exo.  
 xvi. Ip̄s aut̄ p̄para  
 bant sibi spicas fricas  
 do r̄ hoc ē qd s̄bdit:  
 b. Dicit̄ tui faci.  
 qd n̄ h̄. cū fa. sabbat.  
 sed x̄p̄s ridet eis ostē  
 dendo q̄ nō faciēbat  
 3 legē: qz aliqd qd est  
 lege p̄hibita b̄n effici  
 tur licitū: pp̄ necessi  
 tatem iminentē: sicut  
 dicit̄ qd legit̄ sanctus  
 manducauit panes p̄  
 positionis sibi datos  
 a sacerdote in necessi  
 tate: r̄ t̄n in lege erat

legistis in lege: quia sabba  
 batū sacerdotēs in templo  
 sabbatūz violant et sine cri  
 mine sunt: Dico autem vo  
 bis quia templo maior est  
 hic: Si autem sciretis quid  
 est misericordiam volo r̄ si  
 sacrificius: nunquā condem  
 nassetis innocentes. Dñs ē  
 ē fil' homis etiā sabbati. I  
 Et cū inde transisset v̄it  
 in synagogaz eozū: Et ecce  
 hō manū h̄is aridā r̄ itro  
 gabāt eū dicētes: Si h̄ sab  
 batū curat: ut accusaret euz.

ceptū q̄ soli sacerdotes cōederēt q̄ sacerdos idē nō rep̄o  
 bat q̄ d̄dit aliq̄: nec ē d̄uid q̄ cōedit cū v̄itis suis: ex h̄ p̄z  
 q̄ necessitas faciēbat aliqd licitū qd ali' effz illicitū: sic i p̄po  
 sito: dato q̄ nō esset licitū fricare spicas i die sabbati: t̄n sic  
 bat licitū pp̄ necessitatē famis: r̄ hoc est qd dicit̄ saluator: p̄ba  
 r̄itē. ē. Nōne legistis vos. sup. q̄ debet̄ scire legem.

**Q**uid fecit d̄uid. que t̄n r̄putatis sc̄m. **e** Quō in  
 traui r̄. r̄ h̄ s̄m h̄. i. Reg. xxi. c̄cia patēt ex dicti v̄s̄q̄ ibi:  
**A**ut nō legistis. vbi ponit alia r̄riso: qz sacerdotē i die  
 sabbati i tēplo manualiter opabāt: qz imolabāt aialia deo  
 oblata r̄ excoziabāt: r̄ hostias lauabāt r̄ cōstita: r̄ t̄n nō vio  
 labant sabbatūz: qz talia opa erant ordinata ad dei cultū:  
 r̄ hoc ē qd dicit̄ saluator: **S**acerdotes in tēplo sabbatū  
 violāt. i. manualit̄ opant. **h** Et sine crimine qz ēt erat p̄  
 ceptū a dño q̄ talia opa faceret̄ in sabbato: r̄ eadē rōne apli  
 vellentēs spicas in die sabbati r̄ comedētēs ex p̄cepto chri  
 sti nō peccabāt: qz melius ē ip̄i x̄p̄o obedire q̄ vitimas i tē  
 plo offerre: r̄ hoc ē qd dicit̄ saluator: **I** Dico aut̄ vo. qz  
 ma. tem. est h̄. f. ego cui' auēte hoc faciūt sū maior: r̄ in hoc  
 ēt ip̄e ondit̄ sua d̄tate: vnde sequit̄: **S**i aut̄ sciretis. i.  
 intelligeretis id qd scriptum est **O**see. v. Misericordiā volo  
 r̄ non sacrificium. ex quo ostenditur p̄ dictum p̄phete q̄  
 opa misericordie sunt maḡ accepta deo q̄ victimē. **I** M̄  
 q̄ condemnassetis innocētēs. i. discipulos meos in necessi  
 tate famis de licētia mea sibi p̄dicto mō subuenientes: r̄ q̄  
 possēt eos licentiare ostendit: **M** Domin' ēz est r̄. qz  
 obseruantiam illam poterat mutare: sicut patēt q̄ in nouo  
 testamento auctoritate eius mutata est. **n** Et cum inde  
 trāisset. hic ponitur confutatio eozū qui reprehēdebāt  
 eius veritatem in p̄op̄ia persona. r̄ primo ponitur eozūz  
 confutatio: r̄ ex hoc oriens machinatio: ibi Exuntes au  
 tem pharisēi. Circa primum considerandum q̄ ad rep̄ben  
 dendum eum proposuerunt ei questionē maliciose: vtrum  
 licitū esset sabbato curare. qz si nō curaret arguerēt euz de  
 ipotētia: si aut̄ curaret d̄ sabbati transgressiōe: r̄ hoc est qd  
 dicit̄: Interrogabant euz r̄ sequitur: **o** Ut accusarene  
 eū aliq̄ dictoz: inodoz: in ar. iij. r̄ luc. vi. dicitur q̄ ip̄se chri  
 stus interrogauit eos. Dicendum q̄ nō p̄iunt: quia primo  
 interrogauerunt euz maliciose: vt dictum est. **Et hoc scribit**

r̄ sufficienti instructū: r̄ t̄n qd iohes petiuit ampli' instrui.  
 ex 2. c̄m̄z pte insert̄ oppositū p̄me ptis: qz b̄n sequit̄: ille  
 petit̄ de. a. conclusiōe p̄fectius instrui: igr̄ p̄fecte nō fuit i  
 structus: cui' oppositū dicit̄ burgē. addens q̄ 2. mod' scitē  
 di nō sit ita p̄fect' sic p̄m'. ex quo p̄z iohes plus quesisse  
 curiosa q̄ v̄illa sic logica f̄m cōmētatoz ē. metaphy.  
 Nō est sciētia h̄z modus sciēdi: q̄ igr̄ esset p̄fecte instru  
 ctus in theologia r̄ post quereret scire logicāz curiosus  
 ventiret iudicandus. 2. incoeniēs qz burgen. dicit̄ om̄m  
 n̄m iēsu p̄fectiē sciētia acq̄sita p̄ exp̄ientiaz: r̄ hoc v̄i  
 doziūz. 1. 3. xij. di. exponit̄ quō intelligit̄ x̄pm p̄fectiē n̄  
 vt burgen. vult. 3. qd burgen. p̄it iohem baptitā mo  
 uisse sui ex pte q̄stionē: vt eū quē sciret esse x̄p̄z p̄ dinaz  
 reuelationē r̄ sensibile on̄sionē ēt sciret p̄ miraculoz opa  
 tionē v̄i absurdū: qz iudei nō ita plene docti de x̄pi ad  
 uētu cū petēt̄ signa audierūt: Sn̄t̄o p̄uaz signuz q̄rit  
 matth. xij. r̄ sic iohes v̄i ad gn̄ationez p̄uaz p̄ine: eo q̄  
 ab infallibili v̄itate doct' singularia signa r̄ fallibilia q̄  
 rit̄ f̄m burgē. qd absurdū dicit̄ v̄i. Cōfirmat̄ qz post me  
 diū sciēdi infallibile si verū dicit̄ burgen. iohes q̄suiss̄z  
 mediū sciēdi valde fallax. f. opationē miraculoz. Nam  
 r̄ p̄uaz antichristiāi d̄abit̄ talia media nō ad instruēdū  
 h̄z ad fallendum vt dicit̄ br̄us aug. ij. de ciui. dei. ca. xij.  
 r̄ lxxxiij. q̄stionū. q. lv. r̄ q̄plūma alia q̄ contingūt huic  
 singularitati.

**C**aplm. XII.  
**I**n illo. Postq̄ posita ē p̄firmatio dubitantū  
 caplo p̄cedenti: vt p̄z in discipul' iohis: hic p̄nt  
 ponit̄ p̄futatio ipugnantū. f. pharisēoz: r̄ d̄i  
 uidit̄ in d̄uo: p̄ce: qz aliq̄ ipugnabāt iēsu x̄pm rep̄ben  
 dendo ei' v̄itate q̄si 3 legē agentē: aliq̄ calūniando eius  
 b̄ōitate: opa d̄ina v̄itate facta: de mōi attribuēdo: ibi Tē  
 oblat' ē. alij tentando ei' potestātē: pp̄ hoc q̄rebāt̄ signa  
 de celo: ibi Tūc r̄ndebāt̄ ei qdaz de scrib̄is. alij insidian  
 do ei' assūpte infirmitati: ibi Adhuc eo loq̄ntē. p̄ adhuc  
 i ouas: qz p̄ rep̄hendūt̄ eius v̄itatē i suis discipul': in p̄  
 sona. p̄p̄a: ibi Et cū inde trāisset. In p̄ 3. p̄te rep̄ben

### **[Euangelium Matthaei, Capitulum 12]**

In illo tempore abiit iesus per sata sabbato: discipuli autem eius esurientes coeperunt vellere spicas et<sup>1</sup> manducare. Pharisei autem videntes dixerunt ei: Ecce discipuli tui faciunt quod non licet eis facere sabbatis. At ille dixit eis: Non legistis quid fecerit dauid quando esuriit et qui cum eo erant: quomodo intrauit in domum dei et panes propositionis comedit: quos non licebat ei edere neque his qui cum eo erant: nisi solis sacerdotibus: Aut non legistis in lege: quia sabbatis<sup>2</sup> sacerdotes in templo sabbatum violant et sine crimine sunt: Dico autem vobis quia templo maior est hic: Si autem sciretis quid est misericordiam volo et non sacrificium: numquam condemnassetis innocentes. Dominus enim est filius hominis etiam sabbati.]Et cum inde transisset venit in synagogam eorum: Et ecce homo manum habens aridam et interrogabant eum dicentes: Si licet sabbatis curare: ut accusarent eum.

### **[Postilla]**

#### **¶ a. In illo.**

Postquam posita est confirmatio dubitantium capitulo procedenti: vt patet in discipulis johannis: hic consequenter ponitur confutatio impugnantium, scilicet Pharisaeorum: et diuiditur in quatuor partes: quia aliqui impugnabant iesum christum reprehendendo eius veritate quasi contra legem agentem: aliqui calumniando eius bonitatem: opera diuina virtute sancta: daemone attribuendo: ibi Tunc oblatus est, alii tentando eius potestatem: propter hoc quaerebant signa de caelo: ibi Tunc respondebant ei quidam de scribis, alii insidiando eius assumptae infirmitati: ibi Adhuc eo loquente. Prima adhuc in duas: quia primo reprehendunt veritatem in suis discipulis: secundo in persona propria: ibi Et cum inde transisset. In prima ergo parte reprehendunt cum de hoc quod discipuli eius transeuntes die sabbati per blada vellebant spicas et confricantes manducabant grana quasi contra legem agerent ex christi doctrina: considerandum tamen quod non arguebant eos agere contra legem quasi raperent alienum: quia licitum erat intrare segetem proximi et comedere: non tamen metere falce: vt habetur Deut. 23, sed quia violabant sabbatum: quia praeceptum erat in lege quod cibaria praepararentur die praecedenti: et non in die sabbati: vt habentur Exo. 16. Ipsi autem praeparabant sibi spicas fricando et hoc est quod subditur:

---

1 原文ではetが二重に記されている。

2 原文ではsabbatisとなっている。

## 【『マタイによる福音書』第12章〔第1-10節〕】

そのころ、ある安息日にイエスは麦畑を通られた。弟子たちは空腹になったので、麦の穂を摘んで食べ始めた。ファリサイ派の人々がこれを見て、イエスに、「御覧なさい。あなたの弟子たちは、安息日にはしてはならないことをしている」と言った。そこで、イエスは言われた。「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。神の家に入り、ただ祭司のほかには、自分も供の者たちも食べてはならない供えのパンを食べたではないか。あるいは、安息日に神殿にいる祭司は安息日の掟を破っても罪にならない、と律法にあるのを読んだことがないのか。言っておくが、神殿よりも偉大なものがここにある。もし、『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』という言葉の意味を知っていれば、あなたたちは罪のない人たちをとがめなかったであろう。人の子は安息日の主なのである。」イエスはそこを去って、会堂にお入りになった。すると、片手の萎えた人がいた。人々はイエスを訴えようと思って、「安息日に病気を治すのは、律法で許されていますか」と尋ねた。

## 【聖句註解】

### a節 そのころ

洗礼者ヨハネの弟子たちにおいて明らかな如く<sup>3</sup>、疑いを抱く者たちの信仰が強められた後、続いて不信仰者すなわちファリサイ派に対する論駁が記される。その論駁は四つに分割される。(1)イエス・キリストの真理が律法に違反しているとして彼を非難した者たちへの論駁〔第1-21節〕、(2)神聖なる力によって為された業を悪霊に帰してイエスの善性を誣告した者たちへの論駁〔「そのとき、悪霊に取りつかれて……」の箇所〔第22-37節〕〕、(3)イエスの権能を試みて天よりのしるしを求めた者たちへの論駁〔「すると、何人かの律法学者と……」の箇所〔第38-45節〕〕、(4)イエスが引き受けた弱さを待ち伏せていた者たちへの論駁〔「イエスがなお群衆に……」の箇所〔第46-50節〕〕。(1)はさらに二つに分割される。(1-1)第一に、自身の弟子たちに関して真理を非難する者たちへの論駁〔第1-8節〕。(1-2)第二に、固有のペルソナに関して真理を非難する者たちへの論駁〔「イエスはそこを去って……」の箇所〔第9-21節〕〕。(1-1)では、安息日に麦畑を通っていたイエスの弟子たちが麦の穂を摘み取って食べていたことについて、キリストの教えによってその弟子たちが律法に違反したとして不信仰者たちが非難している。他人のものを強奪したとして弟子たちの律法違反を主張しているわけではないことには注意が必要である。なぜならば、近場の畑に入って作物を食べること自体は許されているからである。だがやはり、『申命記』第23章〔第26節〕に記されているように、作物を鎌で刈り取ってはいけぬ。それは安息日の掟を破ることになってしまう。なぜならば、『出エジプト記』第16章〔第28-29節〕に記されているように、安息日の前日に食事を用意しておき、安息日には食事を用意してはならないと律法で命じられているからである。ところで、弟子たちは自分の手で穂を摘み取って食事を用意したのであるが、このことは律法に則っている。

3 『マタイによる福音書』第11章第2-6節。



**¶ b. Discipuli tui faciunt quod non licet eis facere sabbatis,**

sed christus respondet eis ostendendo quod non faciebant contra legem: quia aliquid quod est lege prohibitum bene efficitur licitum propter necessitatem imminens: sicut dauid qui legitur sanctus manducauit panes propositionis sibi datos a sacerdote in necessitate: et tamen in lege erat praeceptum quod soli sacerdotes comederent qui sacerdos inde non reprobatur quod dedit aliquis: nec etiam dauid quod comedit cum viris suis: ex hoc patet quod necessitas faciebat aliquid licitum quod alias esset illicitum: sic<sup>4</sup> in proposito: dato quod non esset licitum fricare spicas in die sabbati: tamen fiebat licitum propter necessitatem famis: et hoc est quod dicit salvator pharisaeis.

**¶ c. Nonne legistis<sup>5</sup>,**

vos supple qui debetis scire legem.

**¶ d. Quid fecerit dauid,**

quem tamen reputatis sanctum.

**¶ e. Quomodo intravit etc.,**

et hoc factum habetur 1 Reg. 21, cetera patent ex dictis vsque ibi:

**¶ f. Aut non legistis,**

vbi ponitur alia responsio: quia sacerdotes in die sabbati in templo manualiter operabantur: quia immolabant animalia deo oblata et excoriabant: et hostias lauabant et consimilia: et tamen non violabant sabbatum: quia talia opera erant ordinata ad dei cultus: et hoc est quod dicit saluator:

**¶ g. Sacerdotes in templo sabbatum violant<sup>6</sup>,**

idest manualiter operantur.

**¶ h. Et sine crimie,**

quia etiam erat praeceptum a domino quod talia opera sacerent in sabbato: et eadem ratione apostoli vellentes spicas in die sabbati et comedentes ex praecepto christi non peccabant: quia melius est ipsi christo obedire quam victimas in templo offerre: et hoc est quod dicit saluator:

**¶ i. Dico autem vobis quia templo maior est hic,**

scilicet ego cuius auctoritate hoc faciunt sum major: et in hoc etiam ipse ostendit suam deitatem: vnde sequitur:

---

4 『ヴェネツィア版標準註解付き聖書』ではHicと記されている。

5 聖書本文はNon legistisとなっている。

6 manuculaが指示している箇所と考えられる。



**b節 あなたの弟子たちは、安息日にはならないことをしている**

しかしキリストは、彼らのしたことは律法に反していないと回答している。なぜならば、律法によって禁止されている事柄のうちの或るものは、必要に迫られてのことならば合法とされるからである。たとえば、食事を奪われた聖者ダビデは、祭壇に奉げられたパンを司祭から贈られており、必要としていたためにそれを食べた。だがやはり、律法が命じているところによれば、そのパンを食べるのは司祭たちだけである。しかし、司祭の誰かがそのパンを他者に譲ることは禁止されていないし、ダビデが自身の従者たちと共にそのパンを食べることも禁止されていない。ここからして次のことが明らかである。すなわち、或る事柄においては、必要であるならば合法とされ、そうでなければ違法とされる。だから当該の主題については次のように考えるべきであろう。安息日に穂を摘み取ることは合法ではない。だがやはり、飢えという必要に迫られてのことであれば、合法とされる。これが救世主(イエス)がファリサイ派の人々に語っていることである。

**c節 読んだことはないのか**

律法を知っていなければならないあなたたちが読んだことはないのか、と補完せよ。

**d節 ダビデが何をしたか**

やはり、あなたたちはかの聖人(ダビデ)のことを考慮すべきである。

**e節 自分も供の者たちも空腹だったときに……**

この話は『サムエル記上』第21章〔第1-7節〕に記されている。その他のことはこれまで語ってきたことより明らかである。

**f節 あるいは……と(律法にあるのを)読んだことがないのか**

この箇所では別の回答が与えられている。祭司たちは安息日に神殿で手ずから仕事をしている。すなわち、神に捧げる犠牲の動物を屠殺したり、皮を剥いたり、生贄を洗ったり、そういったことをしている。だがやはり、彼らは安息日の掟を破っていないのである。なぜならば、このような仕事は神の礼拝へと秩序づけられているからである。これが救世主(イエス)の語っていることである。

**g節 安息日に神殿にいる祭司は、安息日の掟を破っても**

つまり、彼らは手ずから仕事をしているのである。

**h節 罪にならない**

なぜならば、祭司たちが安息日に行うこれらの仕事が聖とされているのは、主が命じたことでもあるからである。それと同じ理由で、キリストの指示によって使徒たちが安息日に穂を摘んで食べたことは罪にならない。なぜならば、キリストその人に従うことは、神殿で犠牲を捧げることよりも善いことだからである。これが救世主(イエス)の語っていることである。

**i節 言うておくが、神殿よりも偉大なものがここにある**

すなわち、自身の権威によって弟子たちが従うところの私は神殿よりも偉大である、と主は語っている。またこの箇所では、主は自身の神性をも示している。そのため、以下のように続けられている。

**¶ k. Si autem sciretis,**

idest intelligeretis id quod scriptum est Osee. 5. Misericordiam volo et non sacrificium, ex quo ostenditur per dictum prophetae quod opera misericordiae sunt magis accepta deo quam victimae.

**¶ l. Nunquam condemnassetis innocentes,**

idest discipulos meos in necessitate famis de licentia mea sibi praedicto modo subuenientes: et quod posset eos licentia ostendit:

**¶ m. Dominus enim est etc.,]**

quia obseruantiam illam poterat mutare: sicut patet quod in nouo testamento auctoritate eius mutata est.

**¶ n. Et cum inde transisset,**

hic ponitur confutatio eorum qui reprehendebant eius veritatem in propria persona, et primo ponitur eorum confutatio: secundo ex hoc oriens machinatio: ibi Exeuntes autem pharisaei. Circa primum considerandum quod ad reprehendendum eum proposuerunt ei quaestiones maliciose: vtrum licitum esset sabbato curare, quia si non curaret arguerent eum de impotentia: si autem curaret de sabbati transgressione: et hoc est quod dicitur: Interrogabant eum tunc sequitur:

**¶ o. Ut accusarent eum,**

aliquo dictorum modorum: mar. 3 et luc. 6 dicitur quod ipse christus interrogauit eos. Dicendum quod non contrariantur: quia primo interrogauerunt eum maliciose: vt dictum est. Et hoc scribit matthaeus. Postea autem statuto homine infirmo in medio quaesiuit a phrisaeis si licet sabbato curare quasi repetendo quaestione ab eis motam antequam solueret eam: et hoc secundum scribunt Marcus et Lucas quod tacuit matthaeus et omittunt illud primum quod ipse expressit, sequitur:

### k節 もし、知っていれば

つまり、『ホセア書』第5章<sup>7</sup>に記されている「私が求めるのは憐れみであって、いけにえではない」という聖句を知解していれば。この聖句からは、預言者の言葉によって、犠牲の業よりも憐れみの心による業の方が大いに神に受け容れられるという事実が示されている。

### l節 あなたたちは罪のない人たちをとがめなかったであろう

つまり、飢えのために食料を必要としていたわが弟子たちへ、わが許しを与えることにより、前述の仕方ですぐに助けた弟子たちは、罪のない人たちなのである。また、弟子たちに許しを与え得ることを主は示している。

### m節 人の子は安息日の主なのである

なぜならば、主は安息日の慣例を変えることができるからである。たとえば、新約において自身の権威によって変更した事柄があることは明らかである。

### n節 イエスはそこを去って……

(1-2)ここで固有のペルソナにおいて主の真理を非難した者たちへの論駁が記される<sup>8</sup>。(1-2-1)第一に、彼らへの論駁が記される〔第9-13節〕。(1-2-2)第二に、その論駁をきっかけに開始される計略が記される(「ファリサイ派の人々は出て行き……」の箇所〔14-21節〕)。(1-2-1)について考えるべきは、彼らが主に悪意ある質問——安息日に治療を行うことが許されているか——をしたのは主を非難するためであったという点である。なぜならば、治療しなければ主に能力が欠けていると論難できるし、治療すれば安息日の掟を破っていると論難できるからである。今言ったことが、彼らが主へ以下のように尋ねたとされていることの意味である。

### o節 人々はイエスを訴えようと思って

『マルコによる福音書』第3章〔第1-6節〕と『ルカによる福音書』第6章〔第6-11節〕は別の語り方をしており、そこではキリスト自身が彼らに尋ねている。以下の理由から、諸福音書は矛盾していないと言わなければならない。まず、ファリサイ派の人々が主に悪意ある質問をしている。そしてこのことをマタイは記している。その後、自身が解答を示す前に、病で不自由になっている人を真ん中に立たせてから、安息日にいやすことが許されているかという質問を、尋ね返すようにして、主がファリサイ派の人々に尋ねている。この二次的な部分を、マルコとルカは書き記しているが、マタイは沈黙しているのであり、またマルコとルカはマタイが続いて叙述している最初の部分<sup>9</sup>を削除しているのである。

7 現行版の聖書では、対応しているのは『ホセア書』第6章第6節である。

8 固有のペルソナにおける非難とは、イエスその人の行いや人格に対する非難のことを指す。この非難は、イエス自身ではなく弟子たちの行いが非難されている同章第18節と対になっている。

9 『マタイによる福音書』第12章第11-12節。





裏面・左頁

# Euangelium

710  
42  
480

matth. Postea aut statuto homie infirmo i medio q̄siuit a phariseis si licet sabbato curare q̄si repetedo q̄stione ab eis motaz anteq̄ solueret ea: ⁊ hoc scdm scribūt Mar. ⁊ Lu. qd̄ tacuit matth. ⁊ omittūt illō pmū qd̄ ipse expressit. seq̄t: **¶** Ip̄e aut̄ dixit eis. vbi x̄ps soluit q̄stione p̄ v̄bis oñdēs p̄ locū a minori q̄ li. citū erat sanāe hoiez i die sabbati qz̄ bz̄urū aial lapsū i fouea lictū erat in die sabbati extrahē: q̄ multo fortius hoiez q̄ melior ē cū sit ad imāgines dī factus si in infirmitate ceciderit licitū est sabbato curare: ⁊ h̄ ē qd̄ dicit: **¶** Quis erit ex vobis. ⁊ p̄ ex dicit ⁊ soluit q̄stione facto hominē h̄nē manuz aridam sanando. **¶** Tūc ait hōi rē. ⁊ p̄. **¶** Excūtes aut̄. Hic ponit ip̄oū phariseoz ⁊ ch̄ristuz machinatio: ⁊ ipsius x̄pi humilis declinatio. Homines enim i malicia obstinati per rōnes nō possūt compesci: ⁊ iō pharisei nō potentes x̄po respondere p̄ rōnem iceperēt cogitare aduersus eū fraudē. **¶** Jesus aut̄ sc̄ies. s. machinatioes eoz qz̄ nihil latebat ip̄m: **¶** Recessit inde. nō qz̄ timeret mortē: sed qz̄ futuraz erat vt aliq̄ infirmi xp̄iani non auderēt stare in p̄secutioe: iō ne fuga eoz iputaret in pctm: voluit ostendere facto qz̄ fugere p̄secutionē aliq̄n est licituz: sicut supra plen̄ dicitū ē ca. x. seq̄it. **¶** Et secuti sūt mlti infirmi. s. ex eo qz̄ viderāt p̄dcm hominē sanātū. **¶** Et curauit eos oēs. ex q̄ patz̄ eius benignitas: qz̄ p̄secut̄ a iudeis b̄n̄ficia sanitatū eis ip̄edit. **¶** Et p̄cepit eis. i. sanāt. **¶** Ne manifestū eū facēt. pharisei eū manifestādo non qz̄ mortē timeret vt dicitū est: s̄ vt oñderet qz̄ sic aliq̄n ē licitū i p̄secutioe fugē: ita licitū ē se occultare ad cedendū malicie: ⁊ vt oñderet magnitudinē sue potētie: ⁊ hoc p̄firmat dicitō efa. xlj. fm̄ trāslationē lxx. **¶** Ecce puer meus. i. x̄ps q̄ fuit puer in forma futi: **¶** Elect̄ que elegi. hoc duplī cat̄ ad ostendendū qz̄ ip̄e fuit elect̄ ad p̄ficiendū opus n̄re redēpt̄ōis ⁊ nullus ali: qz̄ p̄ nullū aliuz poterat ita competēt fieri. **¶** Dilct̄ me rē. hoc dicit metaphoricē de dō ad ex primēdū magnitudinē paterne dilectionis ad filiū: sic ap̄o hoies ille q̄ multuz diligēt dī h̄i cordi. **¶** Nonam sp̄m meū sup̄ eū. qz̄ sp̄s sc̄is req̄cūit sup̄ eū i humana nā: vt h̄ēt efa. xj. ⁊ q̄rediet v̄ga d̄ radice iesse rē. seq̄t. Et requiescet sup̄ eū sp̄s sapiētie rē. **¶** Et iudiciū gētib̄ nunciabit: qz̄ x̄ps futuruz iudiciū nūciatūit hōibus p̄ suam p̄dicationē: vt h̄i. j. Sicut i iudicio futuro sententiā iudicij feret i h̄ūanitate: qz̄ in eadē forma in q̄ iudicā est coram pilato in ea sede bit in iudicio: hoc excepto qz̄ tunc apparebit i forma gl̄iosa: ⁊ hoc ē qd̄ dicit Act. j. Hic iesus q̄ assūpt̄ est a vobis sic veni et. s. ad iudiciū sic vidistis euz ascēdentē. i. in forma humanitatis gl̄iosa in q̄ ascēdit in celū. seq̄it. **¶** Nō contēdet. s. vt vindicet vt p̄ ex p̄dictis qz̄ p̄secutione phariseoz delinavit humilr absq̄ p̄tēōe. **¶** Neqz̄ clamabit vt. s. libere tur sic patuit in sua passione. **¶** Neqz̄ audiet aliquis in

plareis vocē ei. qd̄ p̄ ex sua taciturnitate coraz pilato: qz̄ h̄ fuerat p̄dictuz efa. liij. Sicut agnus corā tondeute se obmutescet ⁊ n̄ aperuit os suū. **¶** Harūdinē qual. nō confrin. p̄ harūdinē quassataz intelligit p̄plus iudai- cus a fide ⁊ pictate vacuus. **¶** Et linū sumi. nō exti- p̄ hoc intelligunt gentiles in quibus claritas rōnis naturalis erat extin- cta p̄ p̄secutionē peccati remanente fumo voluntatis malefaciendi. vult q̄ dicit qz̄ x̄ps p̄ fortitudinē dicitis noluit resistere iudeis ⁊ gentilib̄ eū crucifigentib̄: qz̄ iudei crucifixerūt ligatis suis ip̄s iuste accusando. gentiles vero manib̄ ip̄z̄ crucifigēdo: qz̄ milites pilati q̄ erāt gentiles hoc fecerūt: vt h̄i Joh. xix. seq̄it. **¶** Donec eijct̄ at ad victoriā iudiciū. i. donec veniat ad exequēdū extremū iudiciū in q̄ manifestabil̄ sua victoria. Tūc enī inimici ei ponent plenarie sub pedib̄ eius: vt h̄i in ps̄. viij. Dia sb̄icisti sub pedib̄ eius. **¶** Et in no. ei. q̄. spe. qz̄ ad p̄dicationē ap̄tozū gentiles ad fidē p̄uersi sūt: iudeis p̄ maiori p̄te i infidelitate remanentib̄. **¶** Tūc oblat̄ est. hic p̄nter ponit p̄futatō calūnantium x̄pi bonitatē attribuēdo ei miracula sp̄ritui maligno: et p̄mo ponit eozū calūnatio: calūnie cōfutatō: ibi Jesus aut̄ sc̄ies. Circa p̄mū ponit euidens miraculum de ciccione demonis cec̄ ⁊ muti: nō qz̄ talia sint in demone formaliter: s̄ effectiue qz̄ hoies quem obfederat cec̄ ⁊ mutū effecerat: ⁊ iō ip̄o ciccio hō loq̄batur: **¶** Et stupebāt oēs turbe. admirantes dīnam virtutes in ch̄risto. **¶** Et dicebant. nunqd̄ hic est filiū dauid: quasi dicerent sic: qz̄ hic est x̄ps nobis p̄missus de semie dauid. **¶** Pharisei aut̄ audientes. turbas. s. confitentes ipsum esse ch̄ristum p̄pter euidentiā facta d̄. **¶** Dixerunt hic non eijct̄ rē. quia enī factum mirabile negare non poterant: ideo modū faciendū calūniabant dicentes ipsū per aliquem demonem superiorem sibi familiarem ⁊ priuatum eijcere demones inferiores de corporibus obsessorum: sicut supra dicituz est ca. ix. **¶** Jesus autem sciens. Hic ponitur calūnie cōfutatō: et p̄mo ostendit qz̄ miracula que faciebat nō poterāt attribui sp̄ritui maligno: qz̄ oportebat ea attribuere sp̄ritui diuino: ibi Aut facite arbozem bonam. p̄ima in duas: qz̄ p̄lm o ostendit p̄positum p̄ rōnes. ⁊ istozū calūnantium dānationem: ibi Ideo dico vobis. p̄m ostendit q̄uo: rōnibus. p̄ rō talis est: qz̄ si p̄ demonez aliquem eijciebat alios sequitur qz̄ diuilio est̄ inter eos ⁊ sic non posset stare oīu potestas diaboli: ⁊ ex hoc sed̄tur aduentus ch̄risti per quem potestas demonis erat auferenda: ⁊ hoc est quod dicitur: **¶** Omne regnuz dī. con. se desola. rē. ⁊ patet littera. ⁊ rō ponitur ibi:

144/79/14/42

**[Euangelium Matthaei, Capitulum 12]**

Ipse autem dixit illis. Quis erit ex vobis homo qui habeat ouem vnam: et si ceciderit haec sabbatis in foueam nonne tenebit et leuabit eam. Quanto magis melior est homo oue. Itaque licet sabbatis benefacere. Tunc ait homini: Extende manum tuam. Et extendit: et restituta est sanitati sicut altera. Exeuntes autem pharisaei consilium faciebant aduersus eum quomodo perderent eum. Iesus autem sciens recessit inde: et secuti sunt eum multi: et curauit eos omnes. Et praecepit eis ne manifestum eum facerent: vt adimpleretur quod dictum est per esaiaem prophetam dicentem: Ecce puer meus quem elegi: dilectus meus in quo bene complacuit animae meae.] Ponam spiritum meum super eum et iudicium gentibus nunciabit. Non contendet neque clamabit neque audiet aliquis in plateis vocem eius Harundinem quassatam non confringet: et linum fumigans non extinguet: donec eiiciat ad victoriam iudicium: et in nomine eius gentes sperabunt. Tunc oblatus est ei daemonium habens caecus et mutus: et curauit eum ita vt loqueretur et videret. Et stupebant omnes turbae et dicebant: Numquid hic est filius dauid. Pharisaei autem audientes dixerunt: Hic non eiicit daemones nisi in beelcebub principe daemoniorum.] Iesus autem sciens cogitationes eorum dixit eis: Omne regnum diuisum contra se desolabitur...

**[Postilla]**

¶ **a[1]. Ipse autem dixit eis**<sup>10</sup>,

vbi christus soluit quaestionem primo verbis<sup>11</sup> ostendens per locum a minori quod licitum erat sanare hominem in die sabbati quia brutum animal lapsus in foueam licitum erat in die sabbati extrahere: ergo multo fortius hominem qui melior est cum sit ad imaginem dei factus si in infirmitatem ceciderit licitum est sabbato curare: et hoc est quod dicitur:

¶ **b[1]. Quis erit ex vobis,**

et patet ex dictis secundo soluit quaestionem facto hominem habentem manum aridam sanando.

¶ **c[1]. Tunc ait homini etc.,**

et patet.

¶ **d[1]. Exeuntes autem,**

Hic ponitur ipsorum pharisaeorum contra christum machinatio: et ipsius christi humilis declinatio. Homines enim in malicia obstinati per rationem non possunt compesci: et ideo pharisaei non potentes Christo respondere per rationem incepterunt cogitare aduersus eum fraudem.

---

10 聖書本文ではIpse autem dixit illisとなっている。

11 『ヴェネツィア版標準註解付き聖書』ではverboとなっている。

## 【『マタイによる福音書』第12章〔第11-25節〕】

そこで、イエスは言われた。「あなたたちのうち、だれか羊を一匹持っていて、それが安息日に穴に落ちた場合、手で引き上げてやらない者がいるだろうか。人間は羊よりもはるかに大切なものだ。だから、安息日に善いことをするのは許されている。」そしてその人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。伸ばすと、もう一方の手のように元どおり良くなった。ファリサイ派の人々は出て行き、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。イエスはそれを知って、そこを立ち去られた。大勢の群衆が従った。イエスは皆の病気をいやして、御自分のことを言いふらさないようにと戒められた。それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。「見よ、わたしの選んだ子。わたしの心に適った愛する者。この子にわたしの霊を授ける。彼は異邦人たちに裁きを知らせる。彼は争わず、叫ばず、その声を聞く者は大通りにはいない。裁きを勝利に導くまで、彼は傷ついた葦を折らず、くすぶる灯心を消さない。異邦人たちは彼の名に望みをかける。」そのとき、悪霊に取りつかれて目が見えず口の利けない人が、イエスのところに連れられて来て、イエスがいやされると、ものが言え、目が見えるようになった。群衆は皆驚いて、「この人はダビデの子ではないだろうか」と言った。しかし、ファリサイ派の人々はこれを聞き、「悪霊の頭ベルゼブルの力によらなければ、この者は悪霊を追い出せはしない」と言った。イエスは、彼らの考えを見抜いて言われた。「どんな国でも内輪で争えば、荒れ果ててしまい、……」

### 【聖句註解】

#### a[1]節 そこで、イエスは言われた

この箇所では、最初に発した問いに、安息日に人をいやすことが許されているということをおこなった論点<sup>12</sup>から明らかにしつつ、解答している。すなわち、安息日に穴に落ちている理性なき獣を引き上げることは許されているのだから、それゆえ、神の像として創られたために獣よりも優れた存在である人間が無事に陥っているのを安息日にいやすことは、一層許される。今言ったことが、以下に言われていることの意味である。

#### b[1]節 あなたたちのうち、だれか

前述より明らかである。次いで、萎えた手の人をいやす行為によって、主はその問いに解答している。

#### c[1]節 そしてその人に言われた……

前述より明らかである。

#### d[1]節 (ファリサイ派の人々は)出て行き

(1-2-2)ここでは、キリストに対立するファリサイ派の人々による陰謀と、キリストその人の謙りの歪曲が記されている。というのは、堅牢な悪徳を持つ人々は理によって抑えられないからである。そのため、理ではキリストに反論できないファリサイ派の人々は、彼と敵対して、欺瞞を考え始めたのである。

12 「小さな論点」(locus a minori)とは、安息日でも人間は羊を救うはずだという主張のことを指している。これに対して主要な論点は、安息日でも人間は人間を救うべきだという主張の方である。



**¶ e[1]. Iesus autem sciens,**

scilicet machinationes eorum quia nihil latebat ipsum:

**¶ f[1]. Recessit inde,**

non quia timeret mortem: sed quia futurum erat vt aliqui infirmi christiani non auderent stare in persecutione: ideo ne fuga eorum imputaretur in peccatum: voluit ostendere facto quod fugere persecutionem aliquando est licitum: sicut supra plenius dictum est capitulum 10, sequitur.

**¶ g. Et secuti sunt multi infirmi<sup>13</sup>,**

scilicet ex eo quod viderant praedictum hominem sanatum.

**¶ h. Et curavit eos omnes,**

ex quo patet eius benignitas: quia persecutus a iudaeis beneficia sanitatum eius impendit.

**¶ i. Et praecepit eis,**

idest sanatis.

**¶ k. Ne manifestum eum facerent,**

pharisaeis eum manifestando non quia mortem timere vt dictum est: sed vt ostenderet quod sicut aliquando est licitum in persecutione fugere: ita licitum est se occultare ad cedendum maliciae: et vt ostenderet magnitudinem suae potentiae: et hoc confirmat dicto esa. 42 secundum translationem 70.

**¶ l. Ecce puer meus,**

idest christus qui fuit puer in forma serui.

**¶ m. Electus quem elegi<sup>14</sup>.**

Hoc duplicatur ad ostendendum quod ipse fuit electus ad perficiendum opus nostrae redemptionis et nullus alius: quia per nullum alium poterat ita competenter fieri.

**¶ n. Dilectus meus etc.,」**

Hoc dicitur metaphorice de deo ad exprimendum magnitudinem paternae dilectionis ad filium: sicut apud homines ille qui multum diligitur dicitur haberi cordi.

**¶ o. Ponam spiritum meum super eum,**

quia spiritus sanctus requieuit super eum in humana natura: vt habetur esa. 11. Egredietur virga de radice iesse etc., sequitur. Et requiescet super eum spiritus sapientiae<sup>15</sup> etc.

---

13 聖書本文ではet secuti sunt eum multiとなっている。

14 聖書本文ではquem elegiとなっている。

15 『ヴェネツィア版標準註解付き聖書』ではspiritus sanctusとなっている。



**e[1]節 イエスはそれを知って**

すなわち、主は彼らの陰謀を知っていた。なぜならば、いかなる事柄も主に隠しておくことはできないからである。

**f[1]節 そこを立ち去られた**

死を怖れていたからではなく、弱いキリスト教徒たちが将来迫害の中に敢えて立とうとしないように、主は立ち去った。そのため、かの者たちの逃走は罪に数え入れられない。すなわち、或る場合には迫害を逃れることは許されているということを主は示そうとしたのである。そのことは第10章で十分に語った通りである<sup>16</sup>。

**g節 大勢の弱き群衆が従った**

すなわち、前述の手の萎えた人を健康にする場面を見ていたので、彼らは主に従った。

**h節 イエスは皆の病気をいやして**

この箇所より、主の親切さは明らかである。なぜならば、ユダヤ人から迫害されていた者は自身の健康という利益を損なっていたからである。

**i節 戒められた**

つまり、いやした人々を主は戒めた。

**k節 御自分のことを言いふらさないようにと**

ファリサイ派の人々に自分のことを言い触らさないようにと主が言ったのは、前述のように、死を怖れていたからではなく、迫害から逃れることや悪徳を減らすために身を隠すといったことが、或る場合には許されるということを示すためであった。また、自身の大いなる権能を示すためでもあった。また、『イザヤ書』第42章[第1-4節]の七十人訳(セプトゥアギンタ)で言われていることも、そのことを証している。

**l節 見よ、わたしの子**

つまり、しもべ(servus)という形相において子(puer)となったキリストを見よ。

**m節 私の選んだ**

この言葉は、他でもないキリストその方が我々の贖いの業を完成するために選ばれたということを二通りの意味で示している。すなわち、他の誰にもできなかったという意味と、その方だけが適わしい仕方で為し得たという意味で。

**n節 わたしの心に適った愛する者**

この言葉は、神についての、息子に対する父の喜びの大きさを表す比喩的な表現である。それはちょうど、人間の場合にも、大いに愛されし者が「心に留められし者」と呼ばれるのと同様である。

**o節 この子にわたしの霊を授ける**

なぜならば、『イザヤ書』第11章[第1-2節]に「エッサイの株から一つの芽が出て……彼の上に知恵の霊が留まった……」と記されているように、聖霊が人間本性を有する主の上に留まったからである。

16 『マタイによる福音書』第10章第16-24節はイエスによる迫害の予告であり、この箇所への言及だと考えられる。

**¶ p. Et iudicium gentibus nunciabit,**

quia christus futurum iudicium nunciavit hominibus per suam praedicationem: vt habetur infra. Similiter in iudicio futuro sententiam iudicum feret in humanitate: quia in eadem forma in qua iudicatus est coram pilato in ea sedebit in iudicio: hoc excepto quod tunc apparebit in forma gloria: et hoc est quod dicitur Act. 1. Hic iesus qui assumptus est a vobis sic veniet, scilicet ad iudicium sicut vidistis eum ascendentem idest in forma humanitatis gloriosa in qua ascendit in caelum, sequitur:

**¶ q. Non contendet,**

scilicet vt vindicetur vt patet ex praedictis quia persecutionem phrisaeorum declinauit humiliter absque contentione.

**¶ r. Neque clamabit,**

vt scilicet liberetur sicut patuit in sua passione.

**¶ s. Neque audiet aliquis in plateis vocem eius,**

quod patet ex sua taciturnitate coram pilato: quia hoc fuerat praedictum esa. 53. Sicut agnus coram tondente se obmutescet et non aperuit os suum.

**¶ t. Harundinem quassatam non confringet,**

per harundinem quassatam intelligitur populus iudaicus a fide et pietate vacuus.

**¶ v. Et linum fumigans non extinguet,**

per hoc intelliguntur gentiles in quibus claritas rationis naturalis erat extincta per consuetudinem peccandi remanente fumo voluntatis malefaciendi, vult ergo dicere quod christus per fortitudinem deitatis noluit resistere iudaeis et gentilibus eum crucifigentibus: quia iudaei crucifixerunt linguis suis ipsum iniuste accusando, gentiles vero manibus ipsum crucifigendo: quia milites pilati qui erant gentiles hoc fecerunt: vt habetur Iob. 19, sequitur:

**¶ x. Donec eiiciat ad victoriam iudicium,**

idest donec veniat ad exequendum extremum iudicium in quo manifestabitur sua victoria. Tunc enim inimici eius ponentur plenarie sub pedibus eius: vt habetur in psal. 8. Omnia subiecisti sub pedibus eius.

**¶ y. Et in nomine eius gentes sperabunt,**

quia ad praedicationem apostolorum gentiles ad fidem conuersi sunt: iudaeis pro maiori parte in infidelitate remanentibus.

**p節 彼は異邦人たちに裁きを知らせる**

なぜならば、以下で記されているように、キリストは未来の審判を自身の予言によって人々に報せたからである。その予言と同じように、未来の審判では、主は人間のすがたで判決を行う。なぜならば、ピラトの前で裁かれたのと同じ人間のすがたで、主はかの審判の席に座するからである。もっとも、そのときは栄光のすがたで顕現するであろうが。そのことは、『使徒言行録』第1章〔第11節〕で「あなたがたから離れて天に上げられたイエスは——審判のために——天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で——つまり、栄光ある人間のすがたで——またおいでになる」と言われている通りである。

**q節 彼は争わず**

すなわち、既に述べたことから明らかなように、復讐されようとも主は争わない。なぜならば、主は謙虚にも論争せずにファリサイ派の迫害を避けたからである。

**r節 叫ばず**

すなわち、自身の受難において明らかであったように、主は解放されるために叫びはしない。

**s節 その声を聞く者は大通りにはいない**

このことは、ピラトの前で主が沈黙を貫いていたことより明らかである。主が沈黙していた理由は、『イザヤ書』第53章〔第7節〕で予言されていたこと——毛を切る者の前で物を言わない羊のように彼は口を開かなかった——が成就するためであった。

**t節 彼は傷ついた葦を折らず**

傷ついた葦という言葉によって、ユダヤの民が信仰と敬虔さを欠いていたことが知解される。

**v節 くすぶる灯心を消さない**

この言葉によって、異教徒というものが知解される。すなわち、彼らにおいて自然本性的な理性の明瞭さは、悪を為す意志の兆が残存しているために罪を犯してしまう慣習によって消滅しているのである。ゆえに、この箇所が言わんとしているのは、キリストは自身を十字架に架けんとするユダヤ人や異教徒たちに神性の力によって抵抗することを欲さなかった、ということである。彼らが主を十字架に架けんとしていたと言われるのは、ユダヤ人たちは自らの口で不正に主を糾弾し、他方で異教徒たちはその手で主を十字架に架けた——それを行ったピラトの兵士たちは異教徒であった——からである。そのことは『ヨブ記』第19章に記されている如くである。

**x節 裁きを勝利に導くまで**

つまり、自らの勝利が明らかとなる最後の審判が執行される時が来るまで。というのは、その時が来たら、敵たちは主の足元に完全にひれ伏すことになるからである。そのことは『詩篇』第8篇〔第7節〕に「すべてをその足元に置かれました」と記されている如くである。

**y節 異邦人たちは彼の名に望みをかける**

なぜならば、使徒たちへのこの予言のために、異教徒たちは信仰へ回心させられたからである。大部分のユダヤ人は不信仰のままであったけれども。

**¶ z. Tunc oblatuſ est.,**

Hic conſequenter ponitur confutatio calumniantium chriſti bonitatem attribuendo eiſ miracula ſpirituſi maligno: et primo ponitur eorum calumniatio: ſecundo calumniae confutatio: ibi Ieſuſ autem ſciens. Circa primum ponitur euidentia miraculum de eiectione daemoneſ caeci et muti: non quia talia ſint in daemone formaliter, ſed effectiuae quia hominem quem obſederat caecum et mutum effecerat: et ideo ipſo eiecto homo lequebatur:

**¶ a[2]. Et ſtupebant omneſ turbae,**

admiranteſ diuinam virtutem in chriſto.

**¶ b[2]. Et dicebant, numquid hic eſt filiuſ dauid,**

quaſi dicerent ſic: quia hic eſt chriſtuſ nobiſ promiſſuſ de ſemie dauid.

**¶ c[2]. Phariſaei autem audienteſ,**

turbas, ſcilicet confiteſteſ ipſum eſſe chriſtuſ propter euidentiam facti.

**¶ d[2]. Dixerunt hic non eiicit etc.,」**

quia enim factum mirabile negare non poterant: ideo modum faciendi calumniabant dicenteſ ipſum per aliquem daemoneſ ſuperiorem ſibi familiarem<sup>17</sup> et priuatum eiicere daemoneſ inferioreſ de corporibuſ obſeſſorum: ſicut ſupra dictum eſt capitulum 9.

**¶ e[2]. Ieſuſ autem ſciens.**

Hic ponitur calumniae confutatio, et primo oſtendit quod miracula quae faciebat non poterant attribui ſpirituſi maligno: ſecundo quod oportebat ea attribuere ſpirituſi diuino: ibi Aut facite arborem bonam, prima in duas: quia primo oſtendit propositum per rationeſ, ſecundo iſtorum calumniantium damnationem: ibi Ideo dico vobiſ, primo oſtendit quatuor rationibuſ, prima ratio talis eſt: quia ſi per daemoneſ aliquem eiiciebat alioſ ſequitur quod diuſio eſſet inter eoſ et ſic non poſſet ſtare diu poteſtaſ diaboli: et ex hoc ſequitur aduentuſ chriſti per quem poteſtaſ daemoneſ erat auferenda: et hoc eſt quod dicitur:

**¶ f[2]. Omne regnum diuiſum contra ſe deſolatur etc.,**

et patet littera, ſecunda ratio ponitur ibi: ...

---

17 原文ではfamiliaremとなっている。



## z節 そのとき、……連れられて来て……

(2)ここで、キリストの奇跡を悪霊に帰することによる彼の善性の誣告に対する論駁が記される。(2-1)第一に、彼らの誣告が記される〔第22-24節〕。(2-2)第二に、誣告に対する論駁が記される(「イエスは彼らの考えを見抜いて……」の箇所〔第25-37節〕)。(2-1)では、盲目で喋ることもできない人に憑りついていた悪霊の追放による明らかな奇跡が記される。その人が盲目で喋ることもできなかったのは、悪霊に憑りつかれて形相的にこのような状態になっていたからではなく、このような影響を被っていたから——すなわち、悪霊が憑りついた人間を盲目で喋ることもできない状態にしていたから——なのである。そのため、その悪霊が追放されると、その人は語れるようになったのである<sup>18</sup>。

### a[2]節 群衆は皆驚いて

キリストの神的な力に驚嘆しつつ。

### b[2]節 「この人はダビデの子ではないだろうか」と言った

群衆が言わんとしていたのは、この人はダビデの血統より出ずると我々に約束されていたキリストではないか、ということである。

### c[2]節 ファリサイ派の人々はこれを聞き

事実を明かしたゆえに群衆がその人をキリストと認めていると聞いて。

### d[2]節 「悪霊の頭……追い出せはしない」と言った

なぜならば、ファリサイ派の人々は奇跡が為されたことを否定できなかったからである。そのため彼らは、イエスは自ら手下となり内通者となっている上位の悪霊によって下位の悪霊を憑りついている者の肉体から追い出したのだと言って、主が為した奇跡の様態を誣告したのであった。そのことは第9章〔第32-34節〕で既に述べた通りである。

### e[2]節 イエスは、見抜いて

(2-2)ここで誣告に対する論駁が記される。(2-2-1)第一に、主が為した諸々の奇跡を悪霊に帰することは不可能であることが示される〔第25-32節〕。(2-2-2)第二に、奇跡が帰せられるのは神の霊であることが示される(「木が善ければ……」の箇所〔第33-37節〕)。(2-2-1)はさらに二つに分割される。(2-2-1-1)第一に、諸々の論拠を通じて主の企図するところが示される〔第25-30節〕。(2-2-1-2)第二に、それらの誣告に対する糾弾が示される(「だから、言うておく……」の箇所〔第31-32節〕)。(2-2-1-1)では四つの論拠が示されている。第一の論拠は以下の通りである。或る悪霊を通じて他の悪霊たちを追放したとすれば、悪霊たちの間に仲間割れが起こり、かくして悪魔の権能は存続できなかったであろう。〔しかし、事実はそうではなかった。〕このため、キリストが後に到来して、彼によって悪霊の権能が取り去られねばならなかったのである。今言ったことが、次に言われていることの意味である。

### f[2]節 どんな国でも内輪で争えば、荒れ果ててしまい、……

字義的に明らかである。また、次の箇所でも第二の論拠が記されている。……

18 形相的に盲目で喋ることもできないということは、目が見えるという能力や言葉を喋れるという能力が本質的に損なわれているという意味であり、悪霊の作用をこのようなものとして考えた場合、一度悪霊に憑りつかれた者は、悪霊を追い出そうとも二度と視力や発話能力が回復することはない。しかしこの奇跡物語では、悪霊の追放後、視力や発話能力が回復している。そのため、形相的にそのような状態になっていたのではなく、悪霊の阻害によって一時的に能力が妨げられていたに過ぎない、と解釈しなければならない。